

2021年7月17日

## 長野市茶臼山動物園の新施設「オランウータンの森」オープン日レポート

記：スタッフ・内藤 功輝

2021年7月17日（土）、長野市茶臼山動物園に新しいオランウータンの飼育展示施設「オランウータンの森」がオープンしました。

日本に新しいオランウータン飼育展示施設が誕生するのは、2016年の豊橋総合動植物公園のんほいパーク以来です。オープン初日の様子や感想を、スタッフ・内藤が報告いたします。

当日は10時からオープニングセレモニーも開催されました。加藤久雄 長野市長はじめ来賓の方々ご列席のもと、テープカットでオープンです。



テープカットと、「オランウータンの森」エントランス

### ■施設概要

名称：オランウータンの森

放飼場×1

屋内展示場×1

寝室×2 ※今後、隣接するクマ舎を改造して増築予定

### ■レポート

この施設の見どころを4つに絞ってご紹介すると、

- ①斜面樹林をそのまま生かした「生息環境展示」
- ②太陽光降り注ぐ屋内展示場
- ③使ってくれるのが楽しい「スウェイ用の仕掛け」
- ④日本でここだけ。オランウータンと〇〇〇〇の同居計画

となるでしょうか。

## 見どころ①：斜面樹林をそのまま活用した「生息環境展示」

放飼場は、園内のコナラやクヌギ等の豊かな雑木林の一角をそのまま活用しています。



オープンした放飼場と、今まで使用されていたオランウータン舎

放飼場面積は約 670 m<sup>2</sup>。従来のオランウータン舎と比較すると、およそ 28 倍もの広さになったそうです。

この展示をデザインされたのは、大阪芸術大学の若生謙二教授。若生教授は造園学を基礎にした動物園展示デザインの専門家で、大阪市天王寺動物園の「アフリカサバンナゾーン」や、よこはま動物園ズーラシアの「チンパンジーの森」、直近では 2020 年にオープンした東京都恩賜上野動物園の「パンダのもり」なども手掛けられています。



向かって左から、長野市都市整備部・古澤課長補佐、若生教授、おらけん代表・黒鳥。

若生教授と古澤氏は研究室の先輩・後輩のご関係で、

茶臼山動物園「レッサーパンダの森」でも計画段階でタッグを組まれています。

若生教授が意識されたのは、オランウータンの樹上生活の再現を目指した「生息環境展示」だそうです。他の動物園では、樹上行動を再現するためにタワーやヤグラなどを設置している展示もあります。そうした展示の良い点もありますが、若生教授は来園者がよりオランウータンの生息環境をイメージできるよう、長野市役所の担当者や動物園職員の方々と協力し、自然に生育している

木々と、園内で伐採し乾燥させた樹木とを組み合わせた自然味あふれる放飼場を作り上げました。また極力人工的な印象を取り除くため、放飼場を囲むコンクリートの壁面には本物のコケを植え付け、目立たないようにするという配慮もなされています。

加えて、斜面の地形を活用することで、来園者にとって動物が「見上げ」の位置になっています。これは、人間が動物たちに対し畏敬の気持ちを抱くようにするための展示手法で、動物にとっても上から「見下げ」られるストレスをなくす効果があるとされています。

なお余談ですが、作家・山崎豊子女史の長編小説『沈まぬ太陽』では、1980年代のニューヨーク・ブロンクス動物園の描写が登場します（第5巻・2章）。この部分では「見上げ」展示の効果について実に端的に解説されており、女史の取材力と文章力に舌を巻きます。



放飼場内からは観覧通路を「見下ろす」ことになる

## 見どころ②：太陽光降り注ぐ屋内展示場

写真は一見すると「小放飼場」のようですが、実は「屋内展示場」です。



屋根に「ETFE」という特殊なフィルムを用い、天候などで放飼場に出られなくてもオランウータンが日光を浴びることができます。また、写真の青い○部分には床暖房も入っています。動物福祉はもちろんですが、ここでオランウータンが温まってくれば来園者にとっても近くで見やすくなるような心遣いです。また、夏場は暑くなりすぎないように壁面からミストが噴射されるようになっています。

なお、ETFE を建造物の屋根として使用した事例は日本初だそうです。



屋内放飼場の屋根。網の向こうが、透明な ETFE フィルムで覆われている。

さらに展示場内には土の地面に常緑のシラカシとスダジイが植わっていて、自然の雰囲気を醸し出しています。将来これらの木が成長してさらに森林らしくなっていくことも楽しみになりますね。

ところで、屋内展示場で「おや、珍しい」と思って撮ったのが、下の写真です。



これは何…？

これは観覧通路側にある「送風口」です。冬場、室内が暖かく外が寒いと、ガラスが曇ってしまいます。そこでここから温風が出ることによって、曇りを防ぐための設備なのです。

実はこのような送風口は、水族館のラッコ水槽などに設置されていることがあります（いまや日本でラッコを見られる水族館はごくわずかですが…）。ただし、ラッコ水槽の場合は水槽内の方が寒いので、冷風が出ることで曇りを防いでいます。動物園に設置されていて、かつ温風が出る例は、初めて目にしました。

### 見どころ③：使ってくれるのが楽しい「スウェイ用の仕掛け」

先ほど書いたように、放飼場はなるべく自然のままの環境が保たれています。そのなかで数少ない人工的な設備が「スウェイ用の仕掛け」です。「スウェイ」とは、オランウータンが自身の体重を利用して木の幹や枝をしならせ、隣の木へ移動する行動のことです。これにはある程度の体重が必要なため、「世界最大の樹上生活者」とも言われるオランウータンに特徴的な行動です。

この行動を再現するべく、**放飼場中央付近に設置された2本のポール状のものがスウェイ用の仕掛け**です。人間用の遊具メーカーと付き合いのある機器メーカーが開発したそうで、生息環境展示の雰囲気を壊さないように柿渋で着色した消防ホースがかぶさっています。遠目だと竹のようにしか見えません。



スウェイ用の仕掛け（どれだか分かりますか？）



スウェイ用の仕掛けを実演してくださった飼育担当・山口氏

スウェイ用の仕掛けは東京都多摩動物公園のオランウータン舎にも設置されています。ただし、茶臼山のものとは形状やしなり具合などが異なるそうです。茶臼山のオランウータンが今後どのような使い方をしてくれるかとても楽しみです。

#### 見どころ④：日本でここだけ。オランウータンと〇〇〇〇の同居計画

今後の計画として、この施設にはオランウータン以外のある動物の導入が予定されています。オランウータンと同じ東南アジアに生息する動物と一緒に展示することで、来園者に野生環境への想像を促すとともに、それぞれの動物にとっても良い刺激になることが期待されます。いったい何の動物か…。ヒントは、当日の見学者にプレゼントされたマスクケース。お楽しみに。



この中で東南アジアに生息する動物は…？

#### ■ここで暮らすオランウータン

さて、この施設の主役となるオランウータンですが、現在は2頭暮らしています（訪問日時点）。

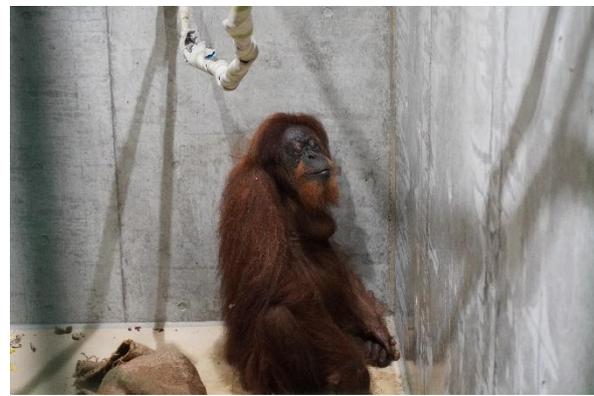
キッキ（1978年4月11日、札幌市円山動物園生）

フジコ（1989年11月21日、茶臼山動物園生、キッキの娘）

オープン初日に展示場で姿を見せてくれたのは娘のフジコでした。

お母さんのキッキは、まだ新施設に慣れていないようで寝室で静養中です。

※2021年7月22日、キッキが亡くなりました。訪問時にこちらに向けてくれた優しい表情が忘れられません。心より哀悼の意を捧げるとともに、キッキのご冥福をお祈りいたします。



放飼場に登場したフジコ（娘）と、室内でお休み中のキッキ（母）

## ■その他

長野市茶臼山動物園は1983年に開園した動物園です。東京ディズニーランドや松潤と同じ年、というイメージが湧きやすいでしょうか。日本の地方動物園は、戦後間もない時期に人々の荒廃した心に安らぎを与えるべく開園したところも多く、それらと比較するとそこまで古い施設ではありません。しかしながら、檻式の展示が多い印象を受けます。

そんななか、若生教授が茶臼山動物園に招かれ、最初に作り上げた生息環境展示が、「レッサーパンダの森」(2009年オープン)です。

ゲートを通して森の中の小道を抜けると、目の前に緑で覆われた放飼場が広がります。背景には遠く長野の山々が見え、さながらヒマラヤ山脈のようです(なお、私はヒマラヤ山脈を見たことはありません)。



この放飼場でのレッサーパンダとの感動的な出逢いを期待して行きましたが、レッサーパンダは高冷地で暮らす動物です。訪問日は長野市の最高気温が34.9℃にもなった真夏日で、パンダたちはクーラーの効いた屋内展示場でお昼寝中でした。ただ屋内展示場も、手を伸ばせば触れそうなくらいに間近でレッサーパンダを見ることができる、とても印象的な施設です。

ところで屋内展示場にはなぜかベルリンの TIERPARK（ティアパーク）のポスターが。TIERPARK といえば、ドイツの旧東ベルリンにある動物園です。旧西ベルリンにはベルリン動物園もあり、このベルリン市内の 2 つの大動物園のライバル関係について語られた本が、黒鳥が監修している『東西ベルリン動物園大戦争』（CCC メディアハウス、2018 年）です。詳しく知りたい方はぜひ。



ティアパークのポスターと、黒鳥監修の『東西ベルリン動物園大戦争』

さて、オランウータン舎の次の計画として、茶臼山動物園ではライオン舎とトラ舎を整備予定とのこと。

新ライオン舎でも「レッサーパンダの森」同様に、長野の山々を借景とした雄大な展示が計画されています。オープンまでの数年間、ワクワクが止まりません。



新ライオン舎建設予定地（写真提供：若生謙二教授）



新施設オープンに向けたサポーター募集

最後に、「オランウータンの森」について詳しくお話を聞かせてくださった若生教授、長野市都市整備部・古澤課長補佐、飼育担当・山口様をはじめとする関係者の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

ありがとうございました。

おわり